

大学院における創造的教育体制構築のための 学習者ニーズ調査

呉大学大学院看護学研究科

佐々木秀美, 古屋敷明美, 金子 潔子
岩本 由美, 東中須恵子

論文要旨 本研究は看護職に従事する者たちが、看護職としてのキャリア形成の一手法としての大学院進学をどの様にとらえ、またどの様に自分自身のキャリア・アップを構築しようとしているのかの学習者ニーズを把握し、創造的な教育体制確保への方策を探る目的で実施した。その結果、看護職者は自己の能力向上の必要性を感じており、向上心は強いが、しかし職業継続の意志が強いことと経済的な問題があり、職業と学業の両立のできる学習システムを求めている。専門看護師の養成のための教育課程策定、教育内容がわかりやすい情報提供、経済的な問題などを解決するための学習システム構築が必要であるとの示唆が得られた。

キーワード：大学院教育、創造的教育体制、学習者ニーズ、専門看護師

■ はじめに

実践科学としての看護学が学際的学問であることから、今日、そのパラダイム転換の時期を迎えている。そのことに鑑み、今日の看護学教育の大学化は著しく、その数は200校を超える勢いである。その中で、看護系高等教育機関においては、高等教育としての機能を果たす責務と同時に看護専門職としての知識・技術力を保証する責務を有している。教育における質的向上は検討すべき課題であるが、中でも高等教育に関わるであろう教育者の質的向上とその育成、あるいは高度実践者の育成を目指すのが大学院教育である。大学院教育の推進は看護学教育の大学化およびその質的向上を推し進めていく原動力になりえる。他方、看護学教育の大学化の波は大学院化へと移行していることも示している。『日本の看護学大学院の現状』¹⁾、『大学院教育のあり方—大学院の目的・役割をどう果たしていくのか』²⁾で提言されているのは、それぞれ、看護学研究科に託される高度実践者としての資質をどのようにして育成していく

かであり、歴史的に見ても看護学の研究は諸科学に遅れをとっている。

看護が科学であるとの見解は否定されようもない事実であるが、そこに大学院の教育目的を考えたとき、その能力は単に教育者としてあるいは研究者としての知性を求めるのみならず、人間的にも魅力ある人物の育成が求められ、研究の本質から言ってもその倫理的態度の育成は重要である。しかれば、関連する諸学問領域と連携しつつ看護に関する独自の研究を推進することにより、看護学の一層の充実を図り、教育の発展を促すことは特に大学院教育に求められることであろう。そこで、問題になるのは大学院における教育課程ということになる。

各看護学研究科教育機関の教育実践についての報告は雑誌『Quality Nursing』が特集している。まず、筆頭に掲げられているのは1980年に設立された聖路加看護大学大学院看護学研究科である。その目的は「広い視野に立って精深な学識を受け、看護学の分野における研究能力または高度の専門性を要する看護の実践および看護教育に関わる者

連絡・抜刷請求先

ささき ひでみ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

等に必用な高度の能力を養うものとする。³⁾である。その内容は『聖路加看護大学大学院看護学研究科の軌跡と展望』⁴⁾に見る。他に先立ち、看護学研究科前期課程(博士)課程が増設されたのは、1988年であり、その目的は「看護学の分野における研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度な研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。」である。聖路加看護大学は、戦前・戦後を通して常に、他看護学教育機関の一步前を進んでおり、わが国看護教育のパイオニア的存在であるから、これらの教育目的は大学院教育機関の範となっている。

次は日本の看護系大学院の草分け的存在である千葉大学大学院看護学研究科は、1979年に設置されている。その教育については『千葉大学大学院看護学研究科について』⁵⁾に寄せられている。日本赤十字看護大学大学院は1993年に修士課程を、1995年に博士課程を発足させた⁶⁾。本大学大学院の教育概要は『日本赤十字看護大学大学院看護学研究科について』⁷⁾に見ることができる。1990年には北里大学大学院看護学研究科を設置された。教育内容は『北里大学大学院看護学研究科の目指すもの』⁸⁾に見る。東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻は1993年に修士課程、1995年に博士課程を設置した⁹⁾。教育概要は『東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科総合保健学専攻』¹⁰⁾に見ることができる。その教育は主として実践に応用する高度基礎理論、技術力、思考・応用能力、人間的倫理観の統合された教育である。

上級看護実践者の育成には卒後教育として発足された認定看護師(Certified Expert Nurse: CEN)、修士課程を修めた専門看護師(Certified Nurse Specialist: CNS)がすでに存在する。また、昨今の医療の高度化や医師不足の問題、地域住民のニーズを充足するためにナースプラクティショナー(Nurse Practitioner)も視野にいたれた大学院での教育プログラムが検討されている。これらの教育は専門職としての看護実践者がエキスパート(Expert)あるいはスペシャリスト(Specialist)として、個人の内在する能力を最大限高めるための指標でもある。専門看護師は1996年に日本看護協会が認定を開始し、同協会と日本看護系大学協議会の間で、専門看護師の大学院教育について合意がなされ、教育課程の基準も示された¹¹⁾。上級実践看護師育成としての認定看護師、専門看護師の教育プログラムは主として日本看護協会が1994

年から実施している¹²⁾。神奈川県立看護教育大学校は、1975年にわが国最初の卒後継続教育機関として設置され、看護教育、看護管理等の教育を担って来た¹³⁾。同教育機関は1998年から認定看護師教育を導入している。

看護系高等教育機関での認定看護師教育は東京女子医科大学看護学部認定看護師教育センター¹⁴⁾、昭和大学病院¹⁵⁾などが実施している。専門看護師育成については『CNS 育成における大学病院との連携』¹⁶⁾の報告があり、南裕子は『看護系大学院教育に位置づけと専門看護師教育の課題について』¹⁷⁾を論述している。彼女によれば専門看護師教育は、現場におけるエキスパート養成とは、若干違いがあるとして大学院における教育を提唱している。本教育は基本的に実践とのかかわりの中で育成することが大切であると考え、専門看護師をどのように現場に浸透させていくかが課題であるとする。今日では専門看護師の育成が、大学院教育の課題であるといっても過言ではない。

三浦弘江他は『看護職者の学習ニーズに関する研究』¹⁸⁾を報告している。これは大学院教育を意図してのものではないが、看護専門職者の学習ニーズについて論じたものである。また、金尋子らは『看護専門職の大学院教育の在り方に関する研究』¹⁹⁾において、修士号・博士号を取得した者の大学院教育における学習ニーズについて述べている。こうした流れの中で本学大学院看護学研究科は、主として理論と実践を中心に、高度実践者の育成を目指してきた。中でも日本における看護教育を担ってきた専門学校の教員の質的向上を図ることが、看護教育のボトム・アップにつながると考え、その教育者育成に焦点を当てた教育課程を構築し、教育実践をなしている。

加えて、臨地における実践者の知的・技術的向上も図りながら、大学院教育にあたるものとの協働によってともに成長する教育を望んできた。したがって、本学研究科は看護界の現実を見据えつつ、看護学のあるべき姿を展望しているという意味では独自の特色を出したものである。しかしながら、大学院教育を受けた実践者が、看護実践の中でその優位性を示すことができれば、現状を克服することにはつながらない。ゆえに現状を維持するのみでは魅力ある大学院教育とはいえず、地域の学習者ニーズにみあった教育実践が必要なのではないかと考える。しかし、臨床現場を対象とした実態調査等を含めての基礎的資料は限

られている。

■ 研究目的

本研究は看護職に従事する者たちが、看護職としてのキャリア形成の一手法としての大学院進学をどの様にとらえ、またどの様に自分自身のキャリア・アップを構築しようとしているのかの学習者ニーズを把握し、創造的な教育体制確保への方策を探る。

■ 研究の意義

本研究によって大学院に対する学習者ニーズが把握できれば、本学大学院研究科がより学習者ニーズに即した創造的教育内容・方法構築のための示唆を得ることができる。学習者ニーズに即した創造的教育内容・方法が構築できれば、看護学発展のためのより実践科学に即した高度実践者育成および看護学研究者の育成が可能となる。

■ 研究方法

1. 研究デザイン及び研究方法

1) 研究デザイン：トライアングレーション (量的研究と質的研究併用)

- (1) 調査研究は質問紙を使用しての留め置き法
質問紙の構成は平井らが実施した大学院教育に関するニーズ調査の3項目²⁰⁾と、澤井らの看護学・保健学系大学院に対する既進学者のニーズ調査²¹⁾の質問項目を参考に研究者らが協議したうえで作成した(資料-1)。

- (2) 自由記述については質的研究

2) 調査方法

- (1) 各施設の施設長及び看護責任者に調査の目的を口頭及び文書で説明し、調査協力への依頼を行い、承諾を得た。
- (2) その後、各施設の責任者が各所属の看護責任者に質問表を人数分配布し、記入させた。
- (3) 記入された質問表は回収され、各施設に郵送、または研究者が回収した。

3) 分析手順

- (1) 項目ごとの単純集計
 - ①基本属性
 - ②大学院への進学意志

(2) 大学院教育への学習ニーズ

- ①性別学習ニーズ
- ②年齢別学習ニーズ
- ③基礎学歴別学習ニーズ
- ④職種別学習ニーズ
- ⑤勤務場所別学習ニーズ
- ⑥進学意思の有無別学習ニーズ

(3) 自由記述内容の分析

自由記述から重要文脈を抽出し、カテゴリー化の段階でその意味解釈を行った。

2. 研究対象

本学近郊の医療機関及び基礎教育機関に勤務している看護職者で、本調査への承諾が得られた者。

3. 研究期間

2007年9月25日から2008年3月31日

4. 研究を行う具体的な場所

回収されたアンケートの分析等は学内で行い、データの保管・取り扱いは慎重に行った。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮については、呉大学看護学部倫理審査要領に沿って1) 対象のプライバシーの保護、2) 研究結果の公表、3) 対象の心身の負担への配慮、4) 対象や施設への同意、5) 研究協力の撤回が自由にできること、6) 対象に生じる不利益や危険性のないこと、7) 対象が受ける利益や看護上の貢献の7項目について文書を作成、本学倫理委員会の承認を得た上で、各施設に対して文書及び口頭で説明し、了解が得られた後に調査を実施した。

■ 調査結果

1. 対象者の基本属性

アンケート調査施設数35施設であり、そのうち回答が得られた施設数は32施設である。調査対象数は1,911名、回答数1,688名(回収率：88%)であった。回答については項目ごとに無記載があったが、無記載も対象者の意思表示であると考え、全ての回答数1,688名(88%)を有効回答とした。以下は有効回答数1,688名についての調査結果である。

1) 性別

女性は1,621名(96.0%)、男性56名(3.3%)、無

記載11名（0.7%）であった。

2) 年 齢

回答者の年齢構造を図1に示した。年代別では、20歳代724名（42.8%）、30歳代480名（28.7%）、40歳代296名（17.5%）、50歳代145名（8.5%）、60歳代9名（0.5%）、無記載34名（2.0%）であった。

3) 職 種

現在の職種についての調査結果を図2に示した。看護師1,496名（88.6%）、保健師61名（3.6%）、助産師49名（2.9%）、看護教員43名（2.5%）、その他23名（1.4%）、無記載16名（0.9%）であった。

4) 勤務場所

勤務場所に関する調査結果を図3に示した。病院は1,475名（87.4%）、訪問看護ステーション・居宅支援センター84名（5.0%）、看護基礎教育機関43名（2.5%）、保健所・地域保健センター25名（1.5%）、老人保健施設15名（0.9%）、その他として診療所・重症心身障害児施設などで26名（1.5%）、無記載は20名（1.2%）であった。

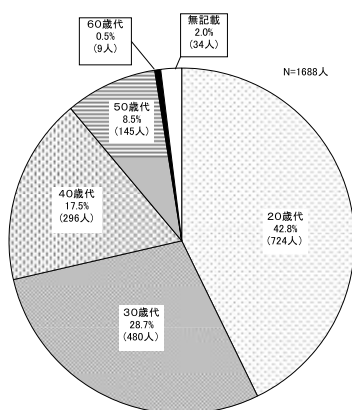


図1 年代別

5) 看護職としての経験年数及び職位

看護職としての経験年数で、5年以下は502名（29.8%）、5～9年422名は（25.1%）、10～14年245名（14.5%）、15～19年156名（9.2%）、20～24年138名（8.1%）、25～29年73名（4.3%）、30年以上88名（5.2%）であった。無記載64名（3.8%）であった。

職位で多いのは一般スタッフ1,303名（77.2%）であり、次に主任職160名（9.5%）、師長職85名（5.0%）、看護教員61名（3.6%）、看護部長職23名（1.4%）、副看護部長職13名（0.8%）、無記載34名（2.0%）であった。

6) 学 歴

学歴に関する調査結果を図4に示した。専門学校卒は1,265名（74.9%）、看護系大学卒144名（8.5%）、一般大学卒92名（5.5%）、短期大学卒85名（5.0%）、大学院卒13名（0.8%）の順であり、その他13名（0.8%）、無記載が76名（4.5%）であった。

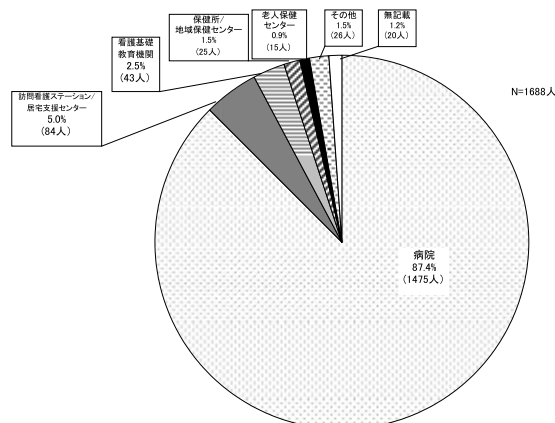


図3 勤務場所

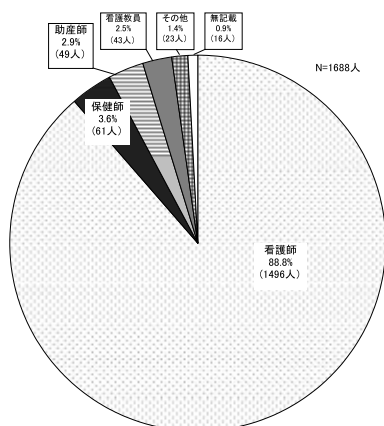


図2 職種別

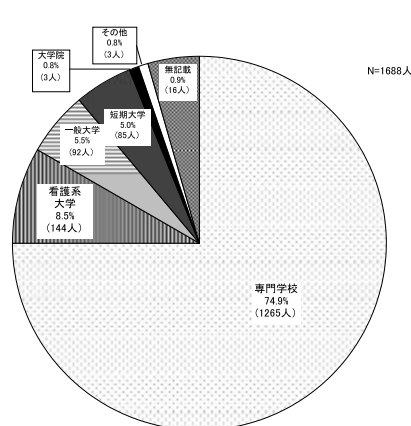


図4 学 歴

7) 病院外研修などの学修経験

これまでの学修経験についての調査結果を図5に示した。病院外での研修経験者は512名(30.3%), 未経験者は1,176名(69.7%)であった。研修経験のあった512名の受講した研修内容(複数回答)は, 実習指導者講習会が187名, 次いで新人看護師指導研修64名, 認定看護管理者研修(県)63名, 訪問看護研修62名, 看護教員養成研修52名, 認定看護管理者教育37名, 緩和ケア17名, 医療安全管理者15名, 認定看護師8名, リスクマネージャー8名, 臓器移植コーディネーター2名, その他広島県看護協会が主催する研修会参加者が124名であった。

8) 研究課題の有無

研究課題の有無に関する調査結果を図6に示した。結果, 研究課題がある者は239名(14.2%), ない者は1,440名(85.3%), 無記載は9名(0.5%)であった。研究課題の内容としては感染管理, 転倒防止, リスクマネジメント, 看護倫理, 管理, 教育, 母性, 小児看護, 術前訪問, せん妄, がん看護, 嚥下訓練, 緩和ケア, 認知症, ケーススタ

ディ, 化学療法, 音楽療法など多様であった。

2. 大学院への進学に関する調査結果

1) 大学院への進学意志

大学院への進学意志がある者についての調査結果を図7に示した。大学院への進学意志がある者は133名(7.9%), どちらともいえない者406名(24.1%), 意思がない者1,077名(63.8%)であり, 無記載は72名(4.3%)であった。大学院への進学意志を男女別で見ると, 男性56名中, 進学意思が有る者は10名(17.9%), どちらともいえない19名(33.9%)であった。この両者を含める無い者25名を上回っていた。女性で進学意思が有る者は123名(7.5%), どちらともいえないと答えた者は388名(23.9%)であった。

2) 大学院で学びたい専門領域

大学院で学びたい専門領域に関する調査結果(複数回答)を図8に示した。大学院で学びたい専門領域は合計611名であり, その内, 成人看護学は173名, 地域看護学74名, 老年看護学67名, 母性看護学46名, 基礎看護学37名, 看護管理37名, 精神看護学33名, 小児看護学33名, 看護学教育16名であった。

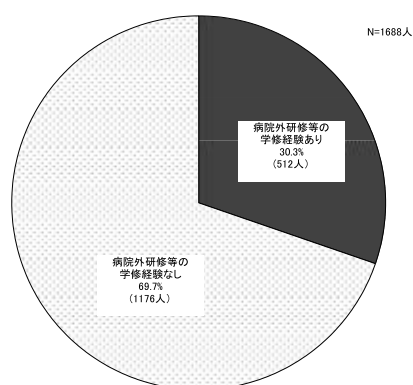


図5 院外研修経験の有無

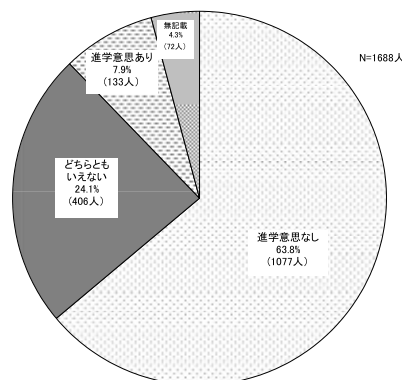


図7 大学院で学ぶ意志

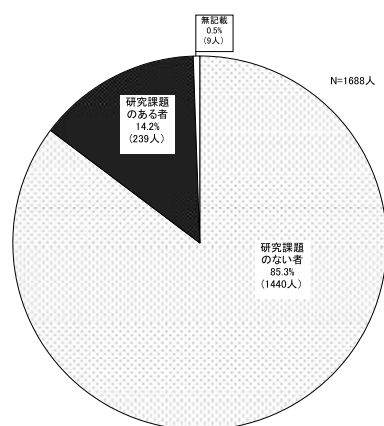


図6 研究課題の有無

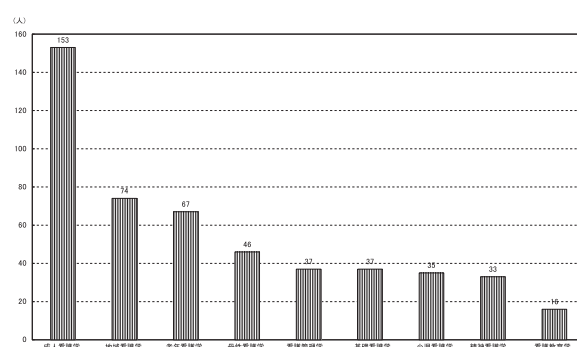


図8 学びたい専門領域

3) 大学院での学びの動機

大学院での学びの動機に関する調査結果（複数回答）を図9に示した。大学院での学びの動機は専門領域の学問的成熟が378名、次いでキャリア形成169名、資格取得150名、リフレッシュ95名、学位取得70名、看護管理・指導者希望52名、看護教育職希望20名、研究課題の究明16名、その他が5名であった。

4) 大学院で重視すること

大学院で重視する教育に関する調査結果（複数回答）を図10に示した。大学院進学に当たって重視していることは学費が483名、次いで、教育課程419名、開講時間（受講しやすさ）382名、通学の便利さ（立地条件）378名、入試項目221名、専門領域担当教員の有無120名、遠隔授業（利便性）107名であった。また、サテライトキャンパスの有無30名、卒業大学であること22名、その他が2名であった。

5) 学 費

大学院進学にあたり妥当な学費は51～100万円／年は262名（15.5%）、50万円／年以下は227名（13.4%）であった。101万円以上／年は89名（5.3%）、わからない・全く予測が立たない・見当もつかないが47名（2.8%）、無記載が1,063名（63.0%）であり、その平均は80万円／年であった。

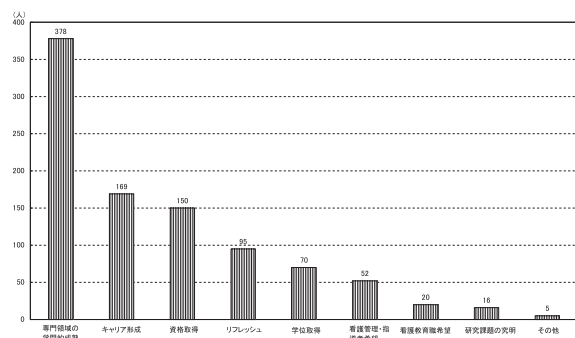


図9 大学院での学びの動機

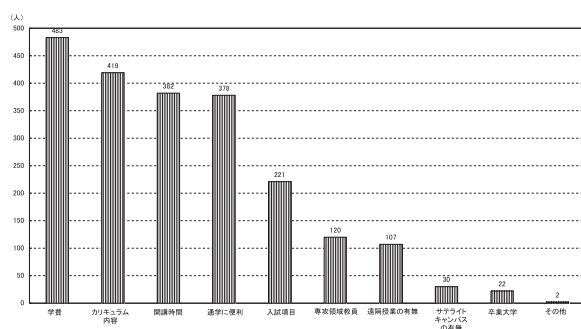


図10 大学院で重視すること

%)であり、その平均は80万円／年であった。

6) 大学院への進学目的

今後の大学院への進学目的に関する調査結果（複数回答）を図11に示した。認定看護師資格取得と答えた者は893名、次に専門看護師が857名、修士号取得希望者71名で、看護研究は35名であった。

大学院への進学目的で認定看護師と答えた者893名が希望する種別の調査結果（複数回答）を図12に示した。緩和ケア246名、救急看護216名、次いでがん性疼痛看護144名、がん化学療法看護120名、認知症看護118名、皮膚・排泄ケア99名、摂食・嚥下障害86名、手術室看護70名、集中ケア60名、看護管理56名、小児救急54名、糖尿病看護54名、新生児集中ケア46名、不妊症看護36名、感染管理20名、乳がん看護、透析看護がそれぞれ15名であった。

次に専門看護師と答えた者857名の希望する種別についての調査結果（複数回答）を図13に示した。がん看護は315名、在宅看護178名、家族看護117名、感染管理74名、クリティカルケア看護40名であった。領域別では成人看護が189名、老年看護157名、小児看護117名、母性看護88名、精神看護74名であった。

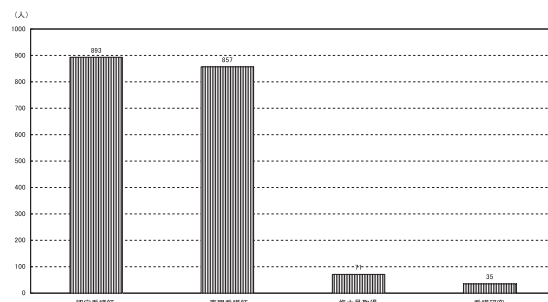


図11 大学院への進学目的

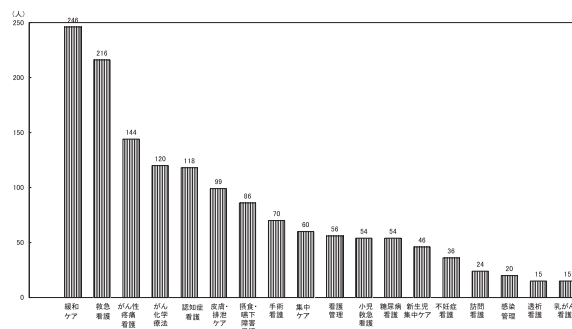


図12 認定看護師

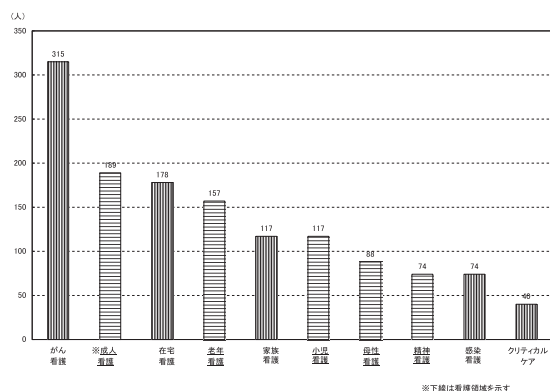


図13 専門看護師

3. 大学院教育への学習ニーズ

1) 性別学習ニーズ

専門看護師と答えた857名の性別学習ニーズ(複数回答)を図14に示した。女性はがん看護309名、成人看護172名、在宅看護163名、老年看護153名、家族看護110名、母性看護87名であった。男性は成人看護17名、がん看護・家族看護・クリティカルケア看護がそれぞれ4名であった。

2) 年齢別学習ニーズ

専門看護師と答えた857名の年齢別学習ニーズ(複数回答)を図15に示した。20歳代が選択した専門看護師領域の総合計は613名であり、その内、がん看護166名、成人看護90名、小児看護67名、在宅看護67名であった。30歳代が選択した専門看護師領域の総合計は389名であり、その内、がん

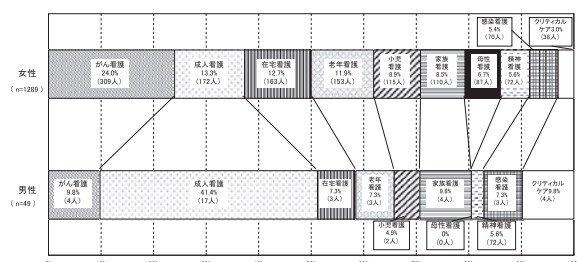


図14 性別学習者ニーズ

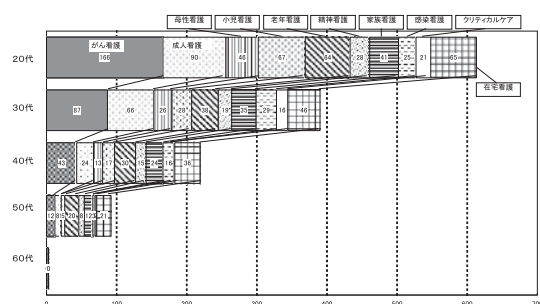


図15 年齢別学習ニーズ

看護87名、成人看護65名、在宅看護46名であった。40歳代が選択した専門看護師領域の総合計は219名であり、その内、がん看護43名、在宅看護36名、老年看護30名であった。50歳代が選択した専門看護師領域の総合計は92名であり、その内、在宅看護21名、老年看護20名、家族看護12名、がん看護12名であった。60歳代が希望する領域はなかった。

3) 学歴別学習ニーズ

専門看護師と答えた857名の学歴別学習ニーズ(複数回答)を図16に示した。看護専門学校卒が選択した専門看護師領域の総合計は982名であり、その内、がん看護234名、成人看護144名、在宅看護128名、老年看護117名、精神看護53名、感染管理62名、クリティカルケア看護29名であった。次に看護系大学卒が選択した専門看護師領域の総合計は135名であり、その内、がん看護35名、成人看護19名、在宅看護19名、母性看護15名、小児看護13名であった。一般大学卒が選択した専門看護師領域はがん看護20名、母性看護10名、小児看護8名、在宅看護8名、家族看護2名である。短期大学卒が選択した専門看護師領域はがん看護14名、成人看護11名、母性看護10名、老年看護8名であった。

4) 職種別学習ニーズ

専門看護師と答えた853名の職種別学習ニーズ(複数回答)を図17に示した。看護師が選択した専門看護師領域の総合計は1,191名であり、その内、

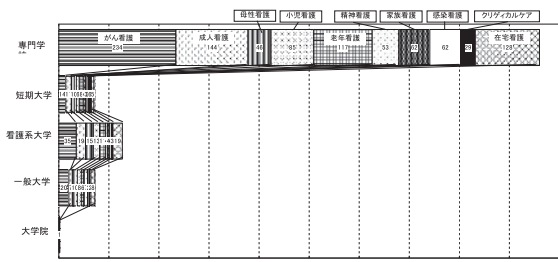


図16 学歴別学習ニーズ

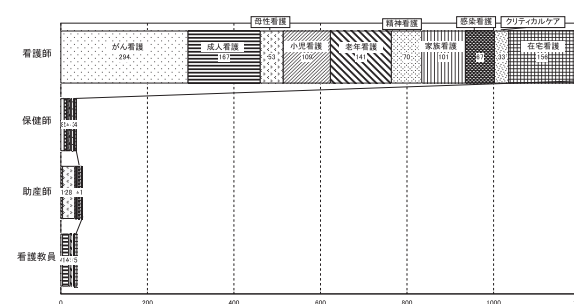


図17 職種別学習ニーズ

がん看護294名、成人看護167名、在宅看護156名、老年看護141名、小児看護109名、家族看護101名であった。助産師が選択した専門看護師領域の総合計は73名であり、その内、母性看護28名、家族看護4名、感染看護4名であった。保健師が選択した専門看護師領域の総合計は38名であり、その内、がん看護8名、成人看護5名であった。看護教員が選択した専門看護師領域の総合計は37名であり、その内、成人看護14名、老年看護5名、在宅看護5名であった。

5) 勤務場所別学習ニーズ

専門看護師と答えた853名の勤務場所別学習ニーズ（複数回答）を図18に示した。病院の看護職が選択した専門看護師領域の総合計は1,127名であり、その内、がん看護279名、成人看護170名、老年看護127名、小児看護104名であった。次に訪問看護ステーションの看護職が選択した専門看護師領域の総合計は100名であり、その内、在宅看護40名、がん看護16名、家族看護12名、精神看護10名、老年看護9名であった。看護専門学校の看護教員が選択した専門看護師領域の総合計は36名であり、その内、成人看護14名、家族看護、母性看護、老年看護、在宅看護がそれぞれ4名であった。

6) 進学意思別学習ニーズ

進学意思別学習ニーズ結果（複数回答）を図19に示した。進学意思のある者で専門看護師領域を

選択した者の総合計は139名であり、その内、がん看護35名、成人看護27名、母性看護14名、家族看護14名であった。進学意思についてどちらとも言えないと答えた者が選択した専門看護師領域の総合計は434名であり、その内、がん看護86名、成人看護63名、老年看護56名、在宅看護51名、家族看護が42名であった。大学院進学意志について無記載の者が1,305名存在したが、その内、がん看護307名、成人看護182名、在宅看護170名、老年看護153名、家族看護109名が専門看護師領域を選択した。いいえと答えた者の内、専門看護師領域を選択した者の総合計は732名であり、その内、がん看護186名、次は在宅看護109名、成人看護92名、老年看護86名、家族看護53名であった。

5. 自由記述による分析

自由記述の内容からカテゴリー化までの過程を表1から表4に示した。カテゴリー化の段階で得られた結果は自分も進学の資格があることを知り、目標が持てた、詳しく情報を知りたい、専門看護師の教育などレベルアップするのは望ましい、詳しく情報が欲しい経済的な安定が得られれば教育を受けたい、仕事と学習の両立ができれば進学したい、子育て中でも学べるシステムが必要今は仕事に専念する、年齢的に進学をすることができない、学ぶ意義が見出せず目標が見出せない、理屈より実践できる教育をするべきである、聴講システムが欲しいなどの意見があった。

■ 考 察

1. 対象者の基本属性

性別では男性56名（3.0%）、女性が1,621名（96.0%）と圧倒的に女性が多い。女性の職業として創設された看護職は、従来から、一般的に女性に適した職業であると考えられていた。加えて1948年に規定された保健婦助産婦看護婦法の各職種の定義には、……を為す女子を言うなどのように規定され、そうした法的規定は、女性が為す職業という考えを一般に普及させた。その考えは社会的通年としても定着し、主として女性を看護師に向けて教育したことから、その伝統的教育スタイルが結果に反映されたと考えられる。

他方、男性56名（3.3%）の年齢層は20歳代～30歳代半ばが80%以上を占めている。1988年の保健婦助産婦看護婦法改定では上記職種の定義から

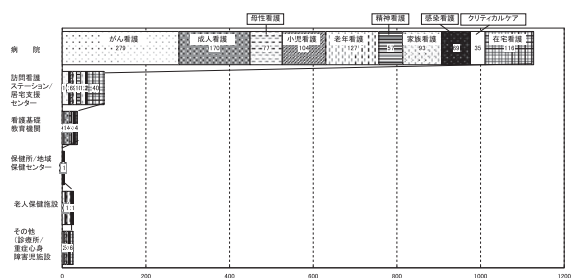


図18 勤務場所別学習ニーズ

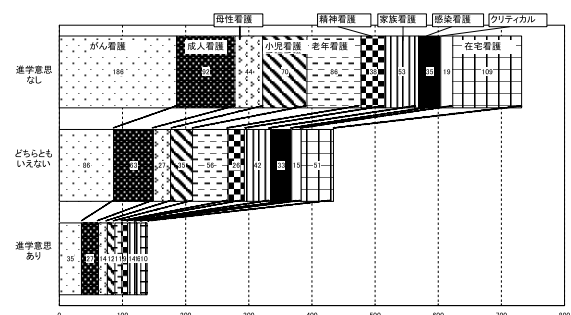


図19 進学意志別学習ニーズ

表1 自由記述内容と重要文脈の抽出

自由記述内容	重要文脈の抽出
<p>1) <u>大学院に進学できることについて</u>、知らなかった、2) <u>大学院があることを知って</u>視野が広がった、3) <u>今回の調査により自分も進学できることを知った</u>、4) <u>これから目標がもてた</u>、5) <u>専門領域を学ぶことに興味はあるが</u> 6) <u>何を学ぶかが曖昧で</u> 7) <u>進学を今考えることができない</u>、8) <u>30代は学習意欲旺盛であり</u>、9) <u>興味あるが</u> 10) <u>30代過ぎると難しい</u>、11) <u>現在 52 歳、管理職になれずこれからなれない</u>。</p> <p>進学を躊躇していることとして、12) <u>一度休職しなければならぬ経済的に難しい</u>、13) <u>学校に通うと休職という型になると思うので</u>、14) <u>大学と病院とのつながりを強めてほしい</u>、15) <u>今は事故がないよう精一杯頑張ることである</u>、16) <u>子育てで行けない</u>、17) <u>現実には生活があるので行きたくても行けないが</u>、18) <u>将来自分の学びとして大学院へ行きたい</u>、19) <u>お金が高くなければ入学してみたい</u>、20) <u>仕事をしながらサポートあれば進学したい</u>、21) <u>経済的援助があるのだろうか</u>、22) <u>もう少し詳しい情報を知りたい</u>。</p> <p>23) <u>呉大に興味がわきました</u>、24) <u>詳しく知りたい</u>、25) <u>進学状況が許されれば行きたい</u>、呉大学で 26) <u>専門看護師になれるのか</u>、27) <u>子育て中でも学べるシステムが知りたい</u>、28) <u>40 歳過ぎているが努力すれば入学でき</u>、29) <u>勉強はついて行けますか</u>、30) <u>現在大学の通信教育を休学中ですが</u> 31) <u>仕事と学習の両立ができる環境であつたら進学したい</u>。32) <u>一般の人も受講（聴講）できるようにしてほしい</u>。</p> <p>大学における看護教育で 33) <u>レベルアップすることは望ましいが</u>、34) <u>理屈ばかりでなく</u>、35) <u>実践できる教育をすべき</u>、36) <u>実践が生かせる教育をすべき</u>。</p>	<p>1) 大学院に進学できることについて、知らなかった</p> <p>2) 大学院があることを知って視野が広がった</p> <p>3) 今回の調査により自分も進学できることを知った</p> <p>4) これから目標がもてた</p> <p>6) 何を学ぶかが曖昧</p> <p>7) 進学を今考えることができない</p> <p>8) 30代は学習意欲旺盛であり</p> <p>9) 興味ある</p> <p>10) 30代過ぎると難しい</p> <p>11) 現在 52 歳、管理職になれずこれからなれない</p> <p>12) 一度休職しなければならぬ経済的に難しい</p> <p>13) 学校に通うと休職という型になると思う</p> <p>14) 大学と病院とのつながりを強めてほしい</p> <p>15) 今は事故がないよう精一杯頑張ることである</p> <p>16) 子育てで行けない</p> <p>17) 現実には生活があるので行きたくても行けない</p> <p>18) 将来自分の学びとして大学院へ行きたい</p> <p>19) お金が高くなければ入学してみたい</p> <p>20) 仕事をしながらサポートあれば進学したい</p> <p>21) 経済的援助があるのだろうか</p> <p>22) もう少し詳しい情報を知りたい</p> <p>23) 呉大に興味がわきました</p> <p>24) 詳しく知りたい</p> <p>25) 進学状況が許されれば行きたい</p> <p>26) 専門看護師になれるのか</p> <p>27) 子育て中でも学べるシステムが知りたい</p> <p>28) 40 歳過ぎているが努力すれば入学できるか</p> <p>30) 現在大学の通信教育を休学中です</p> <p>31) 仕事と学習の両立ができる環境であつたら進学したい</p> <p>32) 一般の人も受講（聴講）できるようにしてほしい</p>

	<p>33) レベルアップすることは望ましい</p> <p>34) 理屈ばかりでなく</p> <p>35) 実践できる教育をすべき</p> <p>36) 実践が生かせる教育をすべき。</p>
--	---

表2 抽出された重要文脈のサブカテゴリー化

抽出された重要文脈	サブカテゴリー
1) 大学院に進学できることについて、知らなかった 3) 今回の調査により自分も進学できることを知った	自分も進学の資格があることを知った
22) もう少し詳しい情報を知りたい 24) 詳しく知りたい	詳しく情報を知りたい
2) 大学院があることを知って視野が広がった 4) これから目標がもてた	視野が広がり目標が持てた。
8) 30代は学習意欲旺盛である 9) 興味ある 23) 呉大に興味がわきました	学習意欲旺盛であり、呉大に興味がある。
28) 40歳過ぎているが努力すれば入学できるか	努力すれば年齢的制約は克服できるのか
33) レベルアップすることは望ましい	レベルアップすることは望ましい
26) 専門看護師になれるのか	専門看護師の教育課程があるのか
11) 現在 52 歳、管理職になれずこれからもなれない	管理職になれずこれからもなれない
6) 何を学ぶかが曖昧	学ぶ意義が見出せない
7) 進学を今考えることができない 10) 30代過ぎると難しい	年齢的に進学を考えることができない
12) 一度休職しなければならず経済的に難しい 17) 現実には生活があるので行きたくても行けない	休職をすると経済的に苦しい
13) 学校に通うと休職という型になると思う 30) 現在大学の通信教育を休学中です	仕事と学業の両立が困難
31) 仕事と学習の両立ができる環境であつたら進学したい 20) 仕事をしながらサポートあれば進学したい	仕事と学習の両立ができたら進学したい
18) 将来自分の学びとして大学院へ行きたい 25) 進学状況が許されれば行きたい	将来自分の学びとして進学状況が許されれば行きたい
14) 大学と病院とのつながりを強めてほしい	大学と病院とのつながりを強めてほしい

19) お金が高くなければ入学してみたい	お金が高くなければ入学してみたい
21) 経済的援助があるのだろうか	
27) 子育て中でも学べるシステムが知りたい	子育て中でも学べるシステム
16) 子育てで行けない	子育てで行けない
15) 今は事故がないよう精一杯頑張ることである	仕事に専念する
34) 理屈ばかりでなく	理屈が多い
35) 実践できる教育をすべき	実践できる教育をすべき
36) 実践が生かせる教育をすべき。	
32) 一般の人も受講（聴講）できるようにしてほしい	聴講システムを作って欲しい

表3 サブカテゴリー化からカテゴリー化

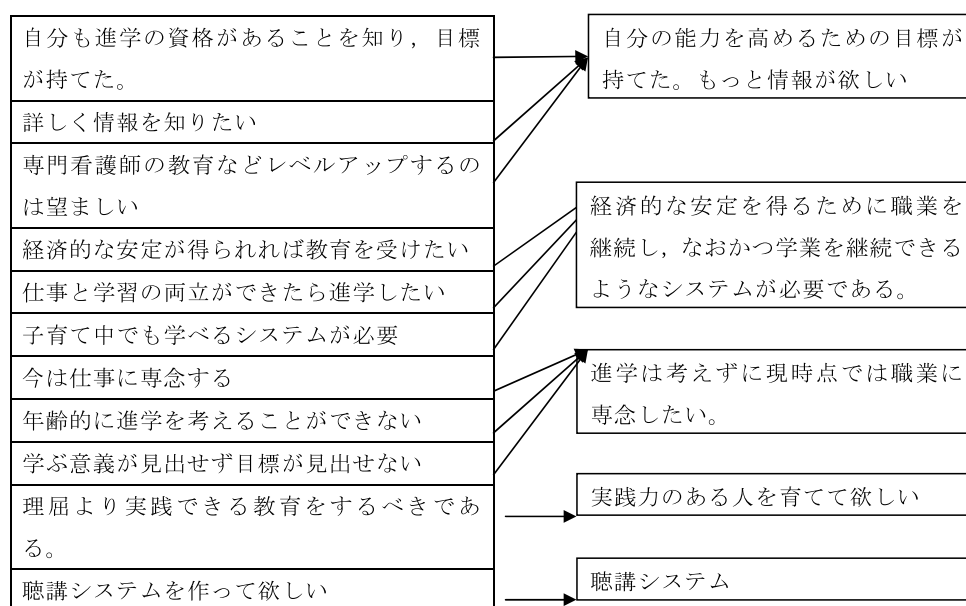
サブカテゴリー	カテゴリー
自分も進学資格があることを知った 視野が広がり目標が持てた。	自分も進学資格があることを知り、目標が持てた。
詳しく情報を知りたい 努力すれば年齢的制約は克服できるのか 学習意欲旺盛であり、呉大に興味がある。	詳しく情報を知りたい
レベルアップすることは望ましい 専門看護師の教育課程があるのか	専門看護師の教育などレベルアップするのは望ましい
年齢的に進学を考えることができない	年齢的に進学を考えることができない
休職をすると経済的に苦しい お金が高くなければ入学してみたい 将来自分の学びとして進学状況が許されれば行きたい	経済的な安定が得られれば教育を受けたい
仕事と学業の両立が困難 学習意欲旺盛であり、呉大に興味がある。	仕事と学習の両立ができたなら進学したい
子育て中でも学べるシステム 子育てで行けない	子育て中でも学べるシステムが必要
今は仕事に専念する	今は仕事に専念する
管理職になれずこれからもなれない 学ぶ意義が見出せない	学ぶ意義が見出せず目標が見出せない
理屈が多い 実践できる教育をすべき	理屈より実践できる教育をするべきである。
聴講システムを作って欲しい	聴講システムを作って欲しい

女子という条文が削除され、それまで男性と女性を区別していた教育内容の区別をなくし、男性も精神病棟以外の病棟への受け入れ体制ができてきた。看護師養成所においても男性の受け入れが認められ、平成4年全体の2.4%であった男性看護師数が2006年には4.7%まで増加してきている²²⁾。

男性看護師の増加は今後、職業の継続につながり、それが向上心につながれば、大学院への進学率も高まることが期待される。

年齢構成で20歳代から30歳代が1,212名(71.8%)も占めているという結果と経験年数5年以下502名(29.8%)、5～9年422名(25.1%)という結果

表4 カテゴリー間の関係とその分析



からは、看護専門職者はそのキャリア形成途上での離職が考えられる。経験年数10年以上の看護職者は、最もエキスパート性を発揮できる段階であるが、数的には少ない。これらは看護実践現場の質の低下をもたらす一因になり得る。さらに経験年数が20年以上である者が299名（17.6%）と数的に少ないこともエキスパート性を発揮できない一因になりえる。それはこの時期の者たちは職業を継続している者は現場から離れた管理職に就くであろうことと、子育てから解放された者たちの職場復帰あるいは定年延長組みも含まれていると考えられるからである。経験年数5年以下が最も多いという結果が示すことは、従来の女性中心社会であること、そのことが結婚、出産といった女性の性役割の中で、職業的継続性を損ない、経験年数の少ないものが多くなっているのではないかと考えられる。

看護職は資格を必要とし、一度取得すると生涯資格になる。特に男性は仕事を継続していく可能性が高く、今後さらに看護の職場に男性は増加していくと考えられる。

勤務場所別では病院が1,475名（87.4%）と圧倒的に多く、訪問看護ステーション・居宅支援センターは84名（5.0%）である。勤務場所にはそれぞれの特殊性と機能があり、そこに働く看護職者の数にも影響を与えていくであろう。病院における組織体制はそれぞれ職位の結果にも反映されている。ピラミッド型の組織の中で、通常にと考えると

役職者が少なく、スタッフが多いという現象は必然的なことである。この長いスタッフ期間の間にキャリア・アップがどの位できるかが、看護実践者としての能力開発あるいは看護の質的向上へ繋がる道であろう。

学歴では専門学校を卒業した者が1,265名（74.9%）、次いで看護系大学が144名（8.5%）、一般大学92名（5.5%）、短期大学85名（5.0%）、大学院13名（0.8%）の順であり、その他13名（0.8%）、無記載が76名（4.5%）であった。専門学校はわが国の伝統的な看護教育機関であり、今日看護系大学の急増が看護系大学卒業生数の増加につながっていると考えられる。他方、一般の大学卒業は数的には少ないが、専門学校卒業生が一般大学に学び、学歴を更新したあるいは一般大学卒業生が看護専門学校で資格を取った後に看護実践をしていると考えられ、この者たちは向学心の強い者たちではないかと考えられる。一般的に大学院への進学は大学卒業である。看護系大学卒業144名（8.5%）、一般大学92名（5.5%）も増加していることから、今後、向学心の強いものが大学院進学に向かうことも考えられ、対象者の教育背景で最も多い看護専門学校卒業の者たちも今後、教育内容の整備によって大学院進学に有為に働く因子であると考えられる。

病院外研修などの学修経験の調査結果では、研修経験をしている者は512名（30.3%）、受講経験のない者は1,176名（69.7%）であった。この結果

からは、絶えず進歩する医療の中で、看護実践のみに頼っているあるいはセミナーや学会での知識のみに頼っている現実があること、あるいは多忙な看護実践現場では、一人が欠けることは全体的に影響を与えることになり、研修に参加しにくい職場環境があるのではないかと考えられる。

研修内容などの学修経験結果から考えられることは、実習指導者講習会や認定看護管理者研修が極めて公的な立場での研修であることである。これらの研修は看護実践者全てに対する学修機会ではなく、向上心のある者の知的好奇心を満足させるほどには至らない。他方、平均経験年数10年の看護職者に全く研修機会が与えられていない者が70%も存在した。看護職者の生涯学習は、職場で選ばれた看護職者が受講できることから、選ばれなかった者は学習機会が得られない現状がある。自らが求めても実践が重要視される現場では、一つの組織の中で協働する責務を考えたとき、自らの向学心や興味のみでは再学習できる機会は限られているように考えられる。

研究課題に関する調査結果で、研究課題がある者は239名(14.2%)、無い者は1,440名(85.3%)であり、極めて研究課題を持たない現状が明らかである。看護実践の現場では、日常的に生じる患者の健康問題回復へのアプローチが主とした役割であり、これらも看護実践者が日々、研究課題として有することではないかと考えるが、実際には意識されていない問題なのではないかと考える。専門職の定義は『これからの看護』²³⁾にも幾つか示されているが、その第一は個人の責任を伴うより知的な職業であるということである。ナイチンゲールの定義によれば、優れた看護婦の3要素は知性、倫理的行動、情熱である。知性とは何をなすべきかがわかり、判断できる能力である。そこには倫理的行動につながる内面的要素がある。専門職の定義の第二は性格において学究的であり、その職の従事者は常にセミナーなどに通って新しい知識を吸収することが望まれ、第三に単に学問的・理論的であるのみならず、目的において明らかに实际的、第四に高度な専門的教育機関を通してのコミュニケーションが可能であること、第五に自分たちの組織を持つこと、第六に個人よりも公共の利益に対し、敏感であり合目的に到達することにより大きな関心が寄せられることなどである。さすれば、以上の定義を満たす限りにおいて、看護は専門職であるとの一致点は見出せるである

う。他方、看護実践者は看護職が専門職であることを認識しながらも、先述した専門職の定義に適って行動するのには個々人によって相違があると考えられる。

2. 大学院への進学に関する調査結果

大学院への進学意思に関する調査結果で進学意思がある者133名(7.9%)、どちらともいえない者406名(24.1%)を含めると将来的に可能性の有る者が539名(32%)存在することになる。現時点において進学可能性の有る者が539名も存在すると考えると、向学心の強いものが多数存在するとの見方もできよう。大学院への進学意思がない者は1,077名(63.8%)と多いが、現時点における調査結果であり、将来的に全くその意思が不変であるとはいいがたい。また、大学院への進学意志を男女別で見ると、男性56名中、進学意思が有る者は10名(17.9%)、どちらともいえない19名(33.9%)である。この両者を含めるとない者25名を上回っていた。女性で進学意思が有る者は123名(7.5%)、どちらともいえないと答えた者388名(23.9%)である。これらの結果から考えられることは女性より男性の方が、大学院への進学意思があり、将来に向けて自己を高めていこうとする姿勢が高いことがうかがわれる。

大学院で学びたい専門領域で多かったのは成人看護の153名であり、次いで地域看護学74名、老年看護学67名であった。先述したように本研究の対象者の働く職場としては病院が多いこと、職種では看護師が多いことなどが、結果に影響を与えていると考える。看護実践者は自己の実践領域における知識・技術の進化を望む傾向があることから、これらの数値が出たのではないかと考える。実習施設の多くは、地域の災害拠点病院でもあり、成人看護学・老年看護学分野での活動が多いことが結果に影響を与えたと考える。

大学院での学びの動機については専門領域の学問的成熟が378名、次いでキャリア形成169名、資格取得150名、リフレッシュ95名、学位取得70名、看護管理・指導者52名、看護教育20名、研究課題の究明16名であった。課題の追求は必ずしも大学院でなければならないということではない。看護実践の中で反省的思考を有すれば、その課題を解決するための思考力は持ち得る。経験が単なる経験であるうちは課題達成にはつながらないし、大学院に入れば必ず課題が達成できるとは限らない

が、少なくとも課題達成への道筋は得ることは可能であろう。

大学院進学にあたり重視していることは学費483名、教育課程419名、開講時間382名、通学の便利さ378名、入試項目221名、専門領域担当教員は120名であった。学費は現実的な問題であるが、基本的に看護職者は病院付属の看護専門学校で教育を受けた者が多い。これらの養成機関は私立大学などのように高額な月謝を支払うのではなく、病院で働く看護職者確保が主要な目的であるために安価で養成される。先述した院外研修も多く、公的に命令されて休職などの待遇を受け、経済的に安定した状況で受講するものが多い。したがって、自身で高額な出費をしてまで、大学院に進学を希望する傾向は薄いと考える。特に看護実践現場では、卒後教育に力を入れ、院内教育でその能力向上を目指しているであろう。その後は、それぞれが自己能力開発に向けて積極的に学習しない限り、向学心が強いものたちの学習意欲を満足させられるような機会はそう多くはないと考えられる。特色ある魅力的な教育課程が構築された場合、進学する可能性は極めて高いと考えられる。開講時間や通学に便利であるなどの要素は働きながら学べる可能性を期待するものであると考える。

大学院への進学目的で認定看護師資格取得と答えたものは893名、次に専門看護師が857名、修士号取得希望者71名で、看護研究は35名であった。これらの結果から考えられることは看護師あるいは保健師の資格取得をしている看護実践者にとって学位の有無は特に実務上、必要なものではなくむしろ、自己の看護自実践能力の質が問われる。その意味では専門看護師、認定看護師の資格は日々の看護実践の中で有為に働くことであろう。ゆえに看護実践者たちは自己の職務遂行上の知識や・技術を高めたいと望んでいることを裏付けている。これは三浦らの『看護職者の学習ニーズに関する研究』²⁴⁾ 研究結果と一致する。病院に就業する看護職者の学習ニーズはまず、所属看護単位の専門性に応じた看護実践に必要な理論・知識・技術・態度であり、次に看護実践・看護業務遂行に必要な対人関係・コミュニケーションの理論・知識・技術・態度であり、第三に看護実践の基盤となる医学・薬理学・栄養学の知識という調査結果と類似である。つまり、看護職者は日々の看護業務を安全に円滑に遂行する責務があり、しかも、絶えず進歩する医療の現場で実感せざるを得ない

現実があると考えられる。

次に大学院への進学目的が認定看護師と答えた者は893名である。緩和ケア、がん性疼痛看護、がん化学療法看護の総数も510名と約半数以上になる。この結果からは、がん看護に関する教育ニーズの高さを示していると考えられる。『国民衛生の動向』²⁵⁾ にも示されているように悪性疾患による死亡率は高く、家族のストレスの問題も含め、看護専門職者は生命危機状況にある方あるいはその家族に対して質の高い看護が求められる。次に、救急看護、集中ケア、手術室看護、小児救急、新生児集中ケアなどの救命救急の認定看護師希望の総数は416名と約半数である。調査された多くの医療機関は救急指定病院あるいは災害拠点病院である。その意味で看護専門職者は日々の看護実践の中で優位に必要な知識・技術の深まりを望んでいるものが少なくない。こうした学びたい意欲を満足させるような教育課程が必要であると考えられるが、認定看護師の教育は主として看護協会主導であるために、大学教育あるいは大学院での教育は困難な問題が生じると考えられる。

次に専門看護師と答えた者857名の内、がん看護315名である。これは先述したがん看護関連の認定看護師受講希望数510名という結果とも一致する。他方、クリティカルケア領域関連の希望者はさほど多くはないが、先述した認定看護師の救急看護、集中ケア、手術室看護、小児救急、新生児集中ケアなどは生命危機状況にある者への支援ということになる。生命危機状況にある者への支援は専門看護師領域からその定義で考えるとクリティカルケア看護領域ということになる。生命危機状況にある者の支援に関わる救命救急分野の受講希望が416名と約半数であることから、クリティカルケア看護領域の教育も希望されていると考えられよう。したがって、大学院での教育ではがん看護、クリティカルケア看護などが学べる教育課程を策定することが魅力ある大学院教育につながると考えられる。

一方、専門看護師の資格が必要であると考えているものが多いのは、現実的な対応として専門領域での資格取得は自己の能力向上につながっていると考えている。しかし、そのことが大学院教育と関連しているとの認識はあまり得られていないのではないかと考える。それは、看護系大学院での専門看護師育成があまり情報化されていない現実もあるのではないかと考える。

3. 大学院教育への学習ニーズ

大学院教育で求められている専門看護師に関する学習ニーズをそれぞれ、性別、年代別、学歴別、資格別、職場別、進学意思別の調査結果から検討を加えてみる。

1) 性別学習ニーズ

専門看護師と答えた857名の性別学習ニーズ(複数回答)の調査結果(図14)では、女性は、がん看護309名、成人看護172名、在宅看護163名、老年看護153名、家族看護110名、母性看護87名であった。男性は、成人看護17名、がん看護・家族看護・クリティカルケア看護がそれぞれ4名であった。男性の特性である冒険心・行動力などが高度な知識・技術とするクリティカルな分野への関心につながるのではないかと考える。

2) 年齢別学習ニーズ

まず、年齢別学習ニーズの調査結果(図15)からは、年代的な特色が現れている。20代・30代の看護師は病院での看護実践が主体であり、その中で、がんの患者に接することが多く、実際に直面する課題に取り組まなければならないために自己の知識・技術不足を認識せざるを得ない高度医療の現実への直面と、その高度医療の第一線での活躍を望んでいる事の現われではないかと考える。専門看護師について、道又が「高いレベルで提供する看護実践は、おおむね高く評価され、臨床現場の多くの管理者や同僚から認知されてきている。」²⁶⁾と述べているように、新たな専門性を身につけることで看護師自身のキャリア・アップと社会からの評価の期待も含まれているのではないかと考えられる。一方、年代の高い看護師に老年看護学へのニーズが高いことは、長年の実践経験からじっくり関わる老年者への対応を身につけ、そこに看護の関心を見出していること、さらに体力的な面も影響しているのであろう。

以上の年齢別学習者ニーズは経験年数と密接に関連する。経験年数の違いによる大学院進学ニーズとの関連では、経験5年以内の看護師にがん看護のニーズが高い。悪性新生物(がん)は日本人の死因の第一位を占め、どの臨床現場にいても遭遇し、がん患者のケアに携わっていると思われる。その中で、がん患者に良いケアをしたいと思いながら、どうしてよいか分からず悩んでいる看護師たちの気持ちのがん看護を学ぶことで、解決の糸口を見つけようとしているものと考ええる。さらに、看護実践で実際にがん患者と向き合う中か

ら生じたニーズではないかとも考える。またそれは、最も向学心の強い時期、あるいは知識が枯渇する中年の時期は後半での職業生活に必要な知識を獲得する必要があるからであるとも考えられ、これらの学習者ニーズを満足させるための教育課程を整備することが必要であろう。

3) 学歴別学習ニーズ

次に学歴別学習ニーズ(図16)では看護専門学校卒が選択した専門看護師領域の総合計は982名であり、その内、がん看護が24%、成人看護15%、在宅看護13%、老年看護13%であった。次に短期大学卒が選択した専門看護師領域の総合計は43名であり、その内、がん看護33%、成人看護26%、母性看護23%、老年看護20%であった。一般大学卒が選択した専門看護師領域の総合計は48名であり、その内、がん看護48%、母性看護21%、小児看護17%、在宅看護17%、家族看護4%であった。看護系大学卒が選択した専門看護師領域の総合計は135名であり、その内、がん看護が26%、成人看護14%、在宅看護14%、母性看護11%、小児看護10%であった。これら学歴別の学習ニーズの調査結果から考えられることは総じてがん看護、成人看護、在宅看護、老年看護などの専門看護師領域が求められており、一般大学あるいは看護系大学卒業の者に母性看護や小児看護を求められていると考えられる。

4) 職種別学習ニーズ

職種別学習ニーズの調査結果(図17)では、看護師が選択した専門看護師領域の総合計は1,191名であり、その内がん看護が25%、成人看護14%、在宅看護13%、老年看護12%、小児看護9%、家族看護8%であった。助産師が選択した専門看護師領域の総合計は73名であり、その内、母性看護が38%、家族看護5%、感染看護5%などであった。保健師が選択した専門看護師領域の総合計は38名であり、その内、がん看護が21%、成人看護13%などであった。看護教員が選択した専門看護師領域の総合計は37名であり、その内、成人看護が38%、老年看護・在宅看護がそれぞれ14%であった。これらの結果が示すことは、看護師はがん看護他比較的幅広く領域を希望している傾向にあるが、助産師は母性看護領域を希望する者が多いなど、極めて自己の職種に関連する領域を希望していることが考えられる。看護実践者は看護専門職者として自己の看護実践分野での学問的成熟を求めているということの現れであり、そのこと

から、さらにキャリア・アップを図りたいと望んでいると考えられる。

5) 勤務場所別学習ニーズ

勤務場所別学習ニーズの結果(図18)では、病院に働いている看護職が選択した専門看護師領域の総合計は1,127名であり、その内、がん看護が25%, 成人看護15%, 老年看護11%, 小児看護9%であった。次に訪問看護ステーションで働く看護職が選択した専門看護師領域の総合計は100名であり、その内、在宅看護が40%, がん看護16%, 家族看護12%, 精神看護10%, 老年看護9%であった。看護教員が選択した専門看護師領域の総合計は36名であり、その内、成人看護39%, 家族看護, 母性看護, 老年看護, 在宅看護がそれぞれ11%名であった。これらの結果では総じてがん看護, 成人看護, 在宅看護, 老年看護領域の教育課程を準備することが求められている。本調査では病院に働く看護師が最も多く、圧倒的多数である彼らの希望する分野あるいは、その専門領域の能力向上が求められての結果であると考えられる。

6) 大学院への進学意思別学習ニーズ

大学院に進学意思のある者の学習ニーズ結果(図19)では、大学院への進学意思がない者あるいは無記載の者であっても専門看護師の資格取得については関心があり、特にがん看護, 成人看護, 在宅看護, 老年看護, クリティカルケア看護への学習ニーズがあるとの意志表示であることが考えられる。このことから大学院修士課程ではがん看護, 成人看護, 在宅看護, 老年看護, クリティカルケア看護領域の教育課程を準備することが求められていると考えられる。

5. 自由記述による分析

自由記述について表1から表4に分析プロセスを示した。その結果、自由記述のカテゴリーからは、自分も進学の資格があることを知り目標が持てた、詳しく情報を知りたい、専門看護師の教育などレベルアップするのは望ましい、といった向学心を持ち大学院への進学についての意志表示が明らかであり、詳しく情報が欲しいとの意欲が感じられる。

次に経済的な安定が得られれば教育を受けたい、仕事と学習の両立ができれば進学したい、子育て中でも学べるシステムが必要という結果からは自己の社会的責務と、経済性との関係から、その両立ができれば大学院に進学したいという希望

を持っていると考えられる。今は仕事に専念する、年齢的に進学を考えることができない、学ぶ意義が見出せず目標が見出せないという結果からは、大学院について今は優先順位が低く、将来的に条件が整うか意義が見出せれば進学を考えるとの意志が考えられる。今回得られた記述内容から、調査対象者の自己の学習意欲の喚起を促したこと、大学院教育への期待・要望が含まれている。これらの意見は大学院進学を意識にかかわらず尊重する必要があると考える。

最後に、理屈より実践できる教育をするべきであるという意見はかなり批判的であるように考えられるが、これは大学院のみならず、高等教育での教育が実務的ではないとの考えからの発想であると考えられる。さらにこれらは大学院における様々な教育課程、あるいは教育システムに関する情報発信不足も考えられる。以上から、大学院における教育は社会人が学べる環境づくりとその情報の発信を明確にするべきであると考えられる。

■ 結 論

学習者ニーズ調査結果を検討した結果、創造的な教育体制構築には、以下の3点が必要である。

1. 看護実践者は学問的成熟につながる教育を希望しており、がん看護, 成人看護, 在宅看護, 老年看護など専門看護師の育成, 教育者ための教育などの教育課程再編が必要である。
2. 経済的安定と大学院で学びたい社会人のための教育環境システムの構築が必要である。
3. 大学院における教育は社会人が学べる環境づくりとその情報の発信を明確にするべきである。

■ おわりに

本学大学院における教育を充実するために、教育体制をいかに構築すべきかについて、主として医療機関に従事する看護専門職者を対象に調査をした結果、看護実践者は学問的成熟につながる教育を希望していることがわかった。その学習者ニーズを満足させるべきは学問的成熟につながる教育課程の再編成が必要であり、加えて学びやすい学修環境づくり、適切な情報公開、学費の適正化などの示唆が得られた。しかしながら、本調査は本学大学院における調査研究であり、対象者が

近隣の医療機関に限定されることから、全ての看護学系大学院の実情を反映するものではない。が、少なくとも本調査によって得られた調査結果は、看護学発展のための高度実践者育成および看護学研究者の育成を目指す大学院教育の質的整備につながり、地域の学習者ニーズにみあった教育実践への足がかりとなる。加えて本学が高度実践者を育成するに当たっては、看護実践と遊離すること

なく、真の対象者である患者とその家族への適切な援助ができる者の育成が可能となる。今後、本学のもつ知的財産を含め、学習環境について様々な制約のある中で、できる限り質の高い教育体制を構築し、社会的ニーズおよび看護界に求められる人材の育成を図りたい。最後に、ご協力いただいた医療機関及び基礎教育機関に勤務している看護職者の方々に心から御礼申し上げる。

引用・参考文献

- 1) 宮本正巳著；日本の看護学大学院の現状, pp.24-25, Quality Nursing, Vol.9, No.5, 文教堂, 1997.
- 2) 杉森みどり著；大学院教育のあり方—大学院の目的・役割をどう果たしていくのか, pp.4-9, Quality Nursing, Vol.9, No.5, 文教堂, 1997.
- 3) 菱沼典子著；聖路加看護大学大学院看護学研究科の軌跡と展望, pp.10-15, Quality Nursing, Vol.6, No.1, 文教堂, 2000.
- 4) 菱沼典子著；聖路加看護大学大学院看護学研究科の軌跡と展望, pp.10-15, Quality Nursing, Vol.6, No.1, 文教堂, 2000.
- 5) 野口美和子著；千葉大学大学院看護学研究科について, pp.10-18, Quality Nursing, Vol.6, No.2, 文教堂, 2000.
- 6) 濱田悦子著；日本赤十字看護大学大学院のカリキュラム改正で目指したもの, pp.17-22, pp.14-16, Quality Nursing, Vol.3, No.11, 文教堂, 1997.
- 7) 濱田悦子, 樋口康子共著；日本赤十字看護大学大学院看護学研究科について, Quality Nursing, Vol.6, No.3, 文教堂2000.
- 8) 林滋子著；北里大学大学院看護学研究科の目指すもの, pp.11-15, Quality Nursing, Vol.6, No.4, 文教堂, 2000.
- 9) 島内節著；東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科について, pp.10-18, Quality Nursing, Vol.6, No.5, 文教堂, 2000.
- 10) 島内節著；東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科総合保健学専攻, pp.17-23, Quality Nursing, Vol.9, No.5, 文教堂, 2003.
- 11) 菱沼典子著；日本看護系大学協議会での専門看護師教育, pp.14-16, quality nursing, Vol.9, No.5, 文教堂, 2003.
- 12) 道又元裕他；認定看護師教育の現状と今後, pp.744-754, 看護教育, Vol.46, No.9, 医学書院, 2005.
- 13) 興良登美代著；卒後継続教育機関としての歴史をふまえて, pp.755-759, 看護教育, Vol.46, No.9, 医学書院, 2005.
- 14) 尾岸恵三子他著；大学の看護学部位置づけと認定看護師教育, pp.760-765, 看護教育, Vol.46, No.9, 医学書院, 2005.
- 15) 市川幾恵著；昭和大学病院における認定看護師の登用と課題, pp.766-769, 看護教育, Vol.46, No.9, 医学書院, 2005.
- 16) 林滋子著；CNS 育成における大学病院との連携, pp.10-14, quality nursing, Vol.5, No.4, 文教堂, 1999.
- 17) 南裕子著；看護系大学院教育に位置づけと専門看護師教育の課題について, pp.4-8, quality nursing, Vol.5, No.4, 文教堂, 1999.
- 18) 三浦弘恵他著；看護職者の学習ニーズに関する研究—病院に就業する看護職者に焦点を当てて—, pp.40-53看護教育学研究, Vol.11, No.1, 2002.

- 19) 金尋子他；看護専門職の大学院教育のあり方に関する研究－修士号又は博士号取得者の学習ニーズと環境整備－，pp.208-216，東保学誌，Vol.5，No.4，2003.
- 20) 平井さよ子，海老真由美，山田聡子：看護職の大学院への進学ニーズに関する調査，pp.33-40，愛知県立看護大学紀要，Vol.8，2002.
- 21) 澤井信江，野島良子，田中小百合：看護学・保健学系大学院に対する既進学者のニーズ，pp.3-11，滋賀医科大学看護学ジャーナル，Vol.2，No.1，2004.
- 22) www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/04/kekka1.html - 23k
- 23) エスター・ルシル・ブラウン（Esther Lucile Brown）著，小林富美栄訳；これからの看護，p75，日本看護協会出版会，1988.
- 24) 前掲書18)，pp.40-53.
- 25) 厚生衛生協会編；国民衛生の動向，廣済堂，2006.
- 26) 道又元裕著；専門看護師・認定看護師の教育と活用状況，pp.17-24，看護展望 Vol.31，No.10，2006.

参考文献

- 1) 看護行政研究会監修；看護六法，新日本法規，2005.

資 料

調査用紙

大学院進学に対する学習者ニーズ調査

各設問について、該当するものには○印、または（ ）内に記述してください。

I. あなたのことについてお尋ねします。

1. あなたの性別は、①女②男
2. あなたの年齢をご記入ください。() 歳
3. あなたの現在の職種は、
①保健師 ②助産師 ③看護師 ④看護教員 ⑤その他 ()
4. あなたの勤務場所は、
①病院 ②診療所 ③保健所 ④訪問看護ステーション ⑤老人保健施設 ⑥看護基礎教育機関
⑦その他 ()
5. あなたの看護職としての経験年数をご記入ください。() 年
6. あなたの現在の職位は、
①看護部長（総師長）職 ②副看護部長（総師長）職 ③師長職 ④主任職 ⑤スタッフ
⑥看護教員 ⑦介護福祉施設職員 ⑧その他 ()
7. あなたの学歴は（複数回答可）
①看護専門学校 ②看護短大 ③看護系大学 ④大学（在学中含む） ⑤大学院（在学中含む）
⑥その他 ()
8. あなたが今までに受講した研修は（複数回答可），
①実習指導者講習会（県看護協会） ②認定看護師教育課程（県看護協会） ③認定看護管理者制度（県看護協会）
④訪問看護研修（県看護協会） ⑤新人看護師指導者研修（本協会） ⑥認定看護管理者教育（本協会）
⑦看護教員養成研修 ⑧養成研修（医療安全管理者、リスクマネージャー、緩和ケアナース、治験・臓器移植コーディネーター等：本協会） ⑨その他 ()
9. あなたは現在、研究等での課題をお持ちですか。あればご記入ください。
①ある 内容 ()
②ない

II. 大学院進学についてお尋ねします。

10. あなたは現在大学院で学びたい（修士号を取得したい）と考えていますか。
①はい ②いいえ ③どちらともいえない
11. あなたが大学院で学びたい（修士号を取得したい）専攻の領域は、
①基礎看護学 ②地域看護学 ③精神看護学 ④母性看護学 ⑤小児看護学 ⑥成人看護学
⑦老年看護学 ⑧看護教育学 ⑨看護管理 ⑩その他 ()
12. あなたが大学院で学びたい（修士号を取得したい）と考える動機は（複数回答可），
①専門領域の学問的成熟 ②研究課題の究明 ③看護教育職を希望しているため
④看護管理・指導者志向 ⑤学位取得 ⑥資格取得 ⑦キャリア形成 ⑧リフレッシュ
⑨その他 ()
13. あなたが大学院進学に際して重視することは（複数回答可），
①カリキュラム内容 ②入試科目 ③通学に便利（立地条件） ④担当教員（専攻領域）
⑤卒業大学である ⑥学費 ⑦開講時間（受講しやすさ） ⑧サテライトキャンパスの有無
⑨遠隔授業等の有無（利便性） ⑩その他 ()
14. あなたが大学院に進学を考えた場合、どの位の学費が妥当と考えますか。
() 万円／年
15. あなたが今後、学びたい（取得したい）と思うことは何ですか。（複数回答可）
1) 修士号の取得
2) 専門看護師
①がん看護 ②成人看護 ③母性看護 ④小児看護 ⑤老年看護 ⑥精神看護 ⑦家族看護
⑧感染看護 ⑨クリティカルケア看護 ⑩在宅看護 ⑪その他 ()
3) 認定看護師
①救急看護 ②皮膚・排泄ケア ③集中ケア ④緩和ケア ⑤がん化学療法看護
⑥がん性疼痛看護 ⑦訪問看護 ⑧感染管理 ⑨糖尿病看護 ⑩不妊症看護
⑪新生児集中ケア ⑫透析看護 ⑬手術看護 ⑭乳がん看護 ⑮摂食・嚥下障害看護
⑯小児救急看護 ⑰認知症看護 ⑱看護管理 ⑲その他 ()
4) 看護研究
5) 看護学以外の学問 ()
6) その他 ()